

いわかづみ

令和三年六月 第八五号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(4)
- ◇ 民具が語る生活史(民具⑫ヤタテ)
- ◇ 方言一考(あぼたぼ)
- ◇ モノ言うもの(関谷学園資料②)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(4)

金丸開田と池田学級の児童

そして、新野利一さん

渡辺 伸 栄

私は今、歴史を掘り起こし記録することについて書くこうとしている。

足下に歴史あり

「金丸開田」について、その作業を行ったのは、金丸小学校の児童と担任の池田久美子先生で、もう26年も前のことになる。

関川村の社会科副読本には「金俣用水」が載っている。ならば、我が地域にも似た出来事はなかったのか。これが池田学級の動機だ

った。

あった。それを知った児童の目は輝いたと池田教諭は書いている。

金丸開田の位置

今春、茅峠の古道探索の際、久しぶりに金丸開田の地に立った。そして、峠へ登る山の斜面から台地上に広がる美田を俯瞰した。
(写真①)

国道113号を山形県へ向かい金丸集落をバイパスで過ぎると、低位の車中からは見えな
いが、右手高台に水田が開けてい
る。緩やかな斜面に広がる耕地の最上部、尾根が舌状に延びて低く広がった台地の上に開けた水田が「金丸開田」だ。



26年前の調査活動

平成7年11月。開田の当事者である新野利一さん宅へ聴き取り調査に何うという児童の後ろに、私も興味津々ついていった。

広い茶の間で熱心に語って下さった利一さん、傍らで飲み物やお菓子を出して下さった奥様、開田の苦労話をされるお姿が、今も目に浮かぶ。

開田が始まったのは昭和35年。その当時、私は中学生でグラウンドの拡張工事をさせられた。唐鍬とモッコで。だから、すべて人力のあまりにも辛い労働で実家へ帰ろうかと思つたという奥様の話を少しは実感できた。

メモを取る児童、先生、私。金丸開田に関する文書資料は、火災で殆ど焼失したという。だから、今ここで記すメモが「史料」になる。それを思えば、自ずと手は真剣になる。

別の日、池田学級の現地踏査にもついていた。

開田現地から用水路に沿って1kmほど上流の取水堰へ。開田の成否は、用水の可否にかかっている。用水路の工夫について、一つ一つ確認して歩いた。サイホンの細い鉄管の上を恐々渡つた児童が懐かしく思い出される。取水堰から中ノ沢川の左右両岸に水路を引いている。左岸側は「中ノ沢水路」でへち

り平の開田を潤し、右岸側が「田端用水」で共同耕作地と呼ばれた「金丸開田」に引かれている。両岸合わせて約10町歩の増反になったという。

記録の公開

その後、池田学級では調査研究の結果を紙芝居にまとめた（写真②はその内の1枚）。そして、全校朝会でそれを発表した。その後もう一度、学区民の前でも発表した。



当時、インターネットが使われ始めていて、新潟大学の教育利用研究プロジェクトに参加していたので、紙芝居を画像にしてHPにも掲載した。

利一さんの話の中核は、いかにして白いコメを手に入れるかということだった。紙芝居には、そのための苦労が確かに書き込まれていた。コメへの飽くなき追求。日本人の原点に迫った「金丸開田の歴史」の掘り起こしと記録になった。

再びの公開

あれから26年、金丸小学校のHPがまだネット上に残っていた。それを元にして、この原稿執筆を機に、私のHPに金丸開田のページを設けた。

かつて利一さんから、これだけが残ったの

だといいただいたコピー①経費負担のノートと②水利権分譲契約書の下書。それと、当時私の作成した③聴き取り調書と④現地踏査の記録。そして、金丸小HPに残っていた⑤池田教諭の文章と⑥児童制作の紙芝居。これらを、「金丸開田」の貴重な資料として掲載した（但し①②は部分）。ぜひ、watanobu.comでご覧いただきたい。

歴史を記録するとは

つい最近、鉾打峠の杉林が大型重機で僅かの間に開田された。改めて60年前の苦闘ともいえる開田作業を思い、ともすれば薄れがちになる日本人のコメ追求の歴史に思いを馳せた。

歴史を書くとは、一つ一つの歴史的事実を掘り起こし記録する作業であるが、そこに、記録に残すに足る「心動かす何か」がなければ、歴史にはなりえない。池田教諭の教育実践に敬意を表しつつ、そんな思いを新たにしている。

民具が語る生活史

民具⑫ ヤタテ（矢立）

道中記を読んで四年目に入りました。今から約一六〇年前の旅の記録で、横帳に几帳面に行程や宿屋の名前、宿泊費、船賃が書かれていま

す。とてもきれいな字なので、読めないときはこちら側の問題で悔しい限りです。

さて、江戸時代の旅人は一体どのように道中、メモを取っていたのでしょうか。

文化七（一八一〇）年に刊行された八隅蘆庵（やすみろあん）の『旅行用心集』は、当時、旅行者のバイブルでした。ここでは道中に所持すべきものとして、脇差や頭巾、扇子、煙草と煙草入れ、などがあげられています。その中に「矢立」と書かれています。こちらが今回取り上げる、「ヤタテ」です。

ヤタテは、墨壺に筆を入れる筒をつけた筆記用具で、携帯することができます。素材は、金属、陶、竹、木などです。

その起源を調べると、「鎌倉時代に戦場で筆記する状況に備えて小型の硯と筆を箆（えびら）の中に入れて携帯した」ことにたどり着きます（画像参照）。箆とは矢を入れて背に負う道具です。この硯を「矢立の硯」と呼んだことから携帯式筆記用具一式を、ヤタテ（矢立）と呼ぶようになりました。

江戸時代には硯にかわって墨壺をつけるようになり、腰にさして携行しました。



→ 武士が矢を入れて背負っている物が箆（えびら）「画像：『前九年絵巻物』（出典：国立国会図書館デジタルコレクションより）」

方言一考・あぼたぼ

元禄時代以降、華美なものが流行し、墨壺を別にした印籠(いんろう)矢立などもできました。江戸時代、旅の流行と共に一般庶民に広まったものと思われまます。

形状は角材状の本体に墨壺と筆の収納部を設け、その上にスライド式に開閉する蓋を取り付けた檜扇(ひおうぎ)型、墨壺に筆を収納する筒を取り付けた柄杓(ひしゃく)型、墨壺と筒を紐で繋いだ印籠(いんろう)型に大別されます。柄杓型は喫煙パイプのような形をしています。(左写真参照：私は随分長い間、家にあるヤタテをキセルだと思ひ込んでいました。)



→写真上：柄杓型ヤタテ(直径19cm)、携帯時
 ↓写真下：使用時 蓋を開けると墨壺があり、

筒の中には筆が収納されている。蓋は墨壺の蓋であると同時に、筆の蓋も兼ねている。

明治時代になると万年筆が普及しその役割を取って代わられた、と一般的には説明されます。ただ、関川村でのヤタテの活躍期間はもう少し長いようです。関川村はその面積の約88%が山林原野です。個人や集落で山を所有している方も多くいらっしやると思いますが、切った木材に印や寸法を書くのにヤタテは非常に便利だったと聞きます。これは昭和三十年代頃のお話です。油性ペンが世に広まったのは昭和二十二(一九五七)年以降ですので、きっと関川村でも少しづつ油性ペンが使われるようになり、ヤタテと選手交代していったのではないでしょう。また、平田大六さんは筆ペンが普及するまでヤタテを旅行に携帯していたとおっしゃっていました。筆ペンの販売開始は昭和四十七(一九七二)年です。今回展示していただいた旅先でのスケッチは、ヤタテを使って描かれたものもあるのですね。このように、道中記の旅人が使用したヤタテは、昭和の旅人にも愛用されました。確かにヤタテには風情があり、旅によく似合うように思われます。

余談ですが、内閣の閣議決定は閣僚の花押による署名を必要とするため、今でもヤタテが使われているそうです。今度目を凝らしてみようと思っています。(田村舞子)

参考文献 民具学会編一九九七「ヤタテ(矢立)」

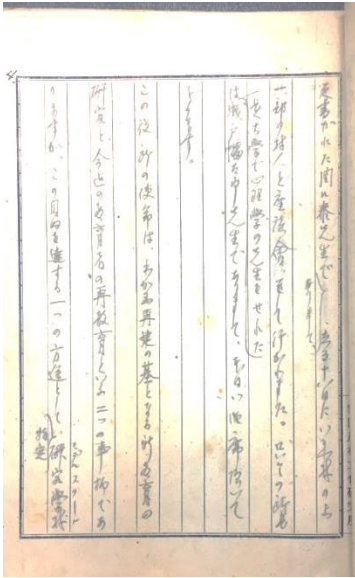
『日本民具辞典』ぎょうせい出版

①「あぼたぼ」②「あばとば」③「がふあらがふあら」④「あふああふあ」⑤「ぐずらもずら」の意味が分かれば生粋の関川人だ。①大きい靴を履き、不安定な足取りで歩く様(幼児の様子)②落ち着きのない様子。慌てる様③サイズの合わない大きい衣類などを着る様④驚き慌てて泡を食う様⑤もたもた、ぐずぐずしている様。

実際に出ている音を言葉にしたものを擬声語と言ひ、音は無く、様子を表現した言葉を擬態語と言ひ、関川村の方言には独特な擬態語が多い。(おそらく他の言葉と違い、擬態語には誰でも作れるという自由性があつて、その意味するところが認められればその地域で使われ続けるという特性があるような気がする)⑤は明らかに擬態語だが、その他は擬声語にも取れる。実際WK氏などは慌てると「アファアファ」と声を出す。「あばとば」とやってきて「アファアファ」と言ひ身振り手振りで何かを訴えようとするのだけだ、気の毒にも一切分からない。大したことは喋らないことが分かっているから、こちらに理解しようとする姿勢が足りないのかもしれないが、言葉も不足、ジェスチャーも不十分で互いに補充していない。結局のこぎりとかペンチを自分で探して、最後は「アファアファアラ」と笑って自己完結し、何か徒労感だけ残して去っていく。(安久)

モノ言うもの・関谷学園資料②

敗戦を境に世の中の価値観は一変した。今まで悪だったものが善となり、否定され続けてきたものが全肯定された。戦後の教育が軍国主義から民主主義に百八十度真逆に転換できたのは、国民の誰にも、そして教育者に自由への渴望があつたからだろう。生徒と違つて教師は大正デモクラシーを生きた人たちだ。軍国主義に傾き、徐々に自由が失われていく社会を懐疑的な気持ちで生き、その気持ちを押し殺して教壇に立っていたはずだ。そんな教師の一人だった佐藤仙一郎は昭和二十一年七月二日の関谷学園開校式辞で、「わが国再建の基となる新教育の研究と今迄の教育者の再教育という二つの事柄であります、この目的を達する一つの方途として指定研究学校」が設立されることとなつたと学園設立の意義を高らかに述べている。(写真は当時の鉛筆書きの自筆式辞のちインクで清書された物も保管)(安久)



歴史館行事の報告

○春の健康登山

〈大蔵山く昔名岳〉

4月24日(土)

総勢23名

○夏の健康登山

〈ヒメサユリの鳥坂山〉

6月5日(土)

総勢28名

○高鼻・貝淵峠と小国町の史跡

4月11日(日)

総勢23名

○黒沢峠回遊

5月22日(土)

総勢30名

○登録文化財

平田大六家

○住宅見学会

5月15日(土)

総勢28名

○古文書解説講座

(4月〜6月)

○古文書解説講座

進捗状況：旅人は讃岐で金毘羅詣を終え、中国地方を西から東に歩いていきます！



お知らせ

○村民ギャラリー

「飯豊黎明の人、藤島玄展」

新潟県の山岳会活動を牽引した藤島玄(げん)は、飯豊連峰登山にも精通し、広く全国に知らしめる活動を続けました。この度「藤島蔵書研究会」のご協力により、藤島玄のご遺族から寄贈された資料の中から遺品、記録などを中心に展示を行い、偉大な岳人の足跡を顕彰します。会期：7月3日(土)〜9月5日(日)



○「広報せきかわ」で、渡辺伸栄さんによる「古文書でタイムスリップ・江戸時代わが村の暮らし」という連載がスタートしました！当館所蔵の小見の庄屋、平田甲太郎家文書から執筆されています。古文書と解説を毎月常設展に展示していますので、ぜひご覧ください。「広報せきかわ」はネットからもご覧いただけます。検索してみてください。

○良寛の歩いた峠を越えての今後の予定 9月18日(土)は、雨で中止となった6月のコース「桜・オノ頭峠と横川ダム周遊」を行う予定です。従って、10月23日(土)は「宇津峠」に変更となります。よろしく願います。

いわかがみ

第八五号

発行日

令和三年六月

編集発行

せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300